

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00635

研究課題名（和文）19世紀における「長崎ハルマ」ローマ字本のグローバルな展開

研究課題名（英文）Global development of "Nagasaki Haruma" Roman alphabet books in the 19th century

研究代表者

陳 力衛（Chin, Rikiei）

成城大学・経済学部・教授

研究者番号：60269470

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）： J. F. van O. フィッセルがオランダへの帰路の途中、中国との中継地点でもあるバタビヤでW. H. メドハーストに、蘭和辞書「長崎ハルマ」のローマ字本（帰国後、オランダ国王に献上）を書写させていることを明確にした。さらに、イギリス、オランダ、フランスで所蔵されるローマ字本が、必要に応じて表記方法などに改編が加えられていることを検証した。中国語訳を付し三カ国語の対訳辞書へと進化を果たしたのもあり、諸言語の対訳辞書として、さらには日本語学習辞書としての役割を担っていたことを解明した。あわせて、19世紀における日本への「近代知」の流入経路、また欧州での日本語の分析の状況を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧州へ流布した蘭和辞書「長崎ハルマ」のローマ字本の足跡をたどることは、日本語がどのように欧州で受容され、さらには展開していったのかということに深くつながっている。ローマ字本は当時の日本語を克明に書き留めているため、流布した先々で用途に応じて改編されている（現代日本語の形成の指標ともなる資料群である）。グローバルな視点からは、蘭日対訳を通じた「日本知」がオランダだけでなく、メドハーストにも受け継がれ、英語の世界へも知れ渡るようになる。また、シーボルトによる中国語訳の追加の試みから分かるように、本研究は、日本語学はもとより諸言語、さらには文化交流史をはじめとした歴史分野にも資するものである。

研究成果の概要（英文）： We have established that J. F. van Overmeer Fisscher had W. H. Medhurst transcribe the Romanized version of the Dutch-Japanese dictionary "Nagasaki Haruma" (which he later presented to the Dutch monarch after his return home) during his stopover in Batavia on his return journey to the Netherlands from China. Furthermore, the Romanized versions held in Britain, the Netherlands, and France underwent modifications in notation as needed. Some of these editions even evolved into trilingual dictionaries by incorporating Chinese translations, thus serving as bilingual dictionaries for various languages, as well as learner's dictionaries for the Japanese language. In addition, we clarified the routes through which "modern knowledge" reached Japan in the 19th century, as well as the state of Japanese language analysis in Europe during that period.

研究分野：日本語学

キーワード：蘭学 ドーフ・ハルマ ローマ字本 蘭和辞書 ホフマン シーボルト フィッセル メドハースト

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、イギリス人宣教師 W. H. メドハーストの編纂した『英和和英語彙』(1830)の研究を進めている際、「編者は日本にかつて滞在したこともなく、日本人と語る機会にも恵まれなかった。しかし、日本からの数人の紳士の御好意により、何冊かの日本の書物—とりわけ日中両文字を併用した書物—を披見しえたので、編者は中国語の知識を用いて以下の語彙表を編纂することができた。」と記載のある序文(原文は英語、日本語に訳した)を読み直したことがきっかけである。それに続く序文には、「編者は日本人の手になる入手し得る最上の著作物に厳密に従った」とあり、日本で流布している確かな書物を底本に選んでいることが窺えたのである。そこで、その紳士はだれなのか、そして、どのような書物を参照したかという実態を解明する必要性を痛感したことで研究を企図した。

(2) さらに、『英和和英語彙』におけるローマ字表記を調査すると、先行する蘭和辞書を視野に入れて考える必要があった。そこで、申請者は、日中の語彙交流、さらに西洋との関わりといった視点から調査・研究を進めることとした。その過程で、オランダのハーグにある「長崎ハルマ」(「ドーフ・ハルマ」)のローマ字本(「ハーグ本」)の蘭和辞書にたどりついた。当該資料のサンプル調査を行った結果、まさに従来の研究史を補う重要な資料だと認識し、さらに早急なる実調査の必要性があるものと判断し、本申請を行うこととした。

2. 研究の目的

(1) このハーグ本は3冊からなる完全な蘭和辞書である。語彙の掲出は、「蘭語 + 日本語ローマ字表記の訳語 + カタカナ表記 + ひらがな表記」の4段構成である。先行する蘭和辞書を外国人向けの日本語学習辞書として改編した内容である。

(2) 来日経験のないメドハーストが書写した「ハーグ本」は、『英和和英語彙』の4段構成(「英語 + 日本語ローマ字表記 + カタカナ表記 + 漢字表記」)の形態に加え、日本語のローマ字表記とカタカナ表記にも影響を与えている可能性がある。「ハーグ本」をメドハーストが『英和和英語彙』の編集の参考としたことが、蘭学から英学へ転換させた直接の原動力となったものと考えられる。さらに、オランダにおける日本語研究に直接寄与した日本語学習の一次資料として、再考を要するものと判断した。

(3) 日本の研究史では従来「長崎ハルマ」のローマ字本を「未熟な、初歩的な」ものとみしていた。その考察は古賀十二郎の1940年代の研究に見られる。しかしながら、彼の写本の挙例はわずかなため様子が伝わるが無かった。そして、以後の研究者(鈴木博(1974, 1975)、杉本つとむ(1978)、松田清(1984))はその写本を未見である。なお、写本は2冊あったが、19世紀半ば出島の大火でオランダ商館の蘭和辞書が焼失したため、出島のオランダ人は本国に複製を要請し、上記の「ハーグ本」をライデン大学の J. J. ホフマンが書写の上 1856年に日本に送付した(「東洋文庫本」)。しかし、時

間の関係上、「蘭語＋日本語ローマ字表記の訳語」の部分しか写していないため、判読には困難な部分が残る。申請者はこの幻の写本が東洋文庫に1934年以來所蔵されていることを発見し、「ハーグ本」と比較した結果、フィッセルの序文(1829)を含め、各ページの行数と見出し語も全く同一で、「カタカナ表記」を部分的にしか取り入れず、「ひらがな表記」を捨象し、時に「漢字表記」を記している。しかし、オランダ商館に備えるものであるから、「未熟な、初歩的な」という判断を再考する必要がある。

(4) P. F. B. von. シーボルトが入手したものは、現在、大英図書館所蔵(「大英本」となっているが、シーボルトが中国人助手の郭成章の力を借りて整理させたものと考えられる。3段(「蘭語＋日本語ローマ字表記の訳語＋カタカナ表記」)が保たれ、4段目に中国語訳を付している。このことについて鈴木博(1975)は「中国語風に記すものがある」、杉本(1978)は「いわゆる唐話語もあるように思う」という認識に過ぎず、中国人による中国語訳文・訳語であることを解していない。つまり、シーボルトは「蘭・日・中」という三ヶ国語の対訳辞書の作成を企図していたのである。

(5) このように、先行研究は、海外に流布したローマ字本(「海外本」)を単に初稿本的なものにとらえ、日本に流布した完成本の漢字仮名交じり本(「国内本」)の参照資料としてきた。しかし、「国内本」に対して「海外本」の独自性という根本的な位置づけを誤っているため、その発展と展開を看過しているのである。

3. 研究の方法

(1) 研究初年度にあたる《令和2年度》は、「ハーグ本」のカタカタ語の索引の作成を進める準備を行った。また、これらの調査と並行して、「ハーグ本」の性格を書誌や内容などの面から精密に把握することに努めた。次年度の《令和3年度》は、より立体的に「ハーグ本」の位置づけを確定していくことを目指した。さらに「東洋文庫本」や、松田清(1984)によって高知で発見されたドーフ直筆のローマ字本の初稿本(「高知本」)を交え、「海外本」としてのローマ字本の状況を整理することを試みた。次々年度の《令和4年度》は、「国内本」をも交え、日本語学習辞書、多言語対訳(対照)辞書としてのローマ字本の発展・展開・深化の過程を総合して研究論文に仕上げることに努めた。期間延長を行った《令和5年度》には、コロナ禍でかなわなかった個々の資料の現地調査を行うことができた。

(2) 「東洋文庫本」はホフマンの日本語研究の直接資料で、ホフマン自身の序文の解読によるものと分析することができるため、「ハーグ本」にはない漢字表記の出自と、日本での利用状況の調査を行った。

(3) メドハーストが『英和和英語彙』で「ハーグ本」をいかに利用したのか、両書の比較から従来英語の読みに従ったローマ字綴りという見解を見直すことができる。あわせて、「ハーグ本」から採用した語彙量や、シーボルト所蔵の『英和和英語彙』を入手したホフマンが「和英の部」を利用して「日蘭辞典」を作成する過程を明らかにすることを検討している。

(4) 全8冊で雑多なものを含む「大英本」は、完成度の高い第1冊(A-Fの部)、第5冊(L-Rの部)、第8冊(W-Zの部)のサンプル調査を行った。その中国語訳の部分に注目し、訳語

の正確さや蘭語の概念の中国語による表現など、19世紀前期の「西洋の近代知」がいかに東洋へ流入したのか、継続して実態を把握する必要がある。

4. 研究成果

(1) 研究の出発点として、メドハーストの辞書編集にかかわる人物と書籍を明らかにした。「『英和和英語彙』（1830）の編集に用いられた近世日本の辞書類　メドハーストの書簡に基づいて」（陳力衛（2022）「成城大学経済研究」235）では、宣教師メドハーストがバタビヤでオランダ商館長から借り写した日本語の辞書や書物を特定した。メドハーストが『英和和英語彙』（1830）の編纂に日本の書籍を利用したことはよく知られていたものの、いままで具体的に名前まで特定できている書籍は少なかった。本稿は新たにメドハーストの書簡を利用して江戸時代に日本で編集された辞書8点を特定することができた。そして、それらの書籍について現在の所蔵先および状況を追跡・確認した。本稿の一連の調査と研究によって、『英和和英語彙』の性格を明らかにし、その成立過程において前進することができた。続いて、「19世紀における『訓蒙図彙』の海外流布と利用」（陳力衛（2022）「成城大学経済研究」236）では特定した辞書8点のうち1点である『訓蒙図彙』がいかに活用されたのかといった点について検討を加えた。つまり、『英和和英語彙』の「英和の部」において、『訓蒙図彙』を意義分類の手本として活用しただけではなく、動植物に関する多くの語のソースとして扱ったことを明らかにした。さらに、中国の広東に伝わった『訓蒙図彙』はメドハーストがシーボルトから受け取ったものであり、現在はアメリカに所蔵されていることを確認し、報告した。以上のメドハーストおよび『英和和英語彙』を対象とした調査・研究により、さらに「長崎ハルマ」のローマ字本の実態に迫ることが可能となった。

(2) そして一歩進んで「出島からバタビヤへの日本知の伝播　蘭和辞書をめぐるメドハーストとフィッセルとの交流」（陳力衛（2023）「成城大学経済研究」239）は、『英和和英語彙』の編纂の最大の難関である日本語のローマ字表記に苦慮しているメドハーストが、1829年いかにしてオランダ商館員として日本に滞在したJ. F. van O. フィッセルがオランダへ持ち帰る途中の蘭和辞書「長崎ハルマ」のローマ字本をバタビヤの地で書写したのかを明らかにした。ローマ字本の叡智は、本研究で判明したその他の日本語の書物とあわせて、メドハーストの辞書『英和和英語彙』にも引き継がれていることを確認した。またバタビヤを中継地点として中国との交流も行われていることを明らかにしている。

(3) 『ドーフ・ハルマ』のもう一つの流れ　フィッセルのローマ字本の位置づけ」（陳力衛（2023）「国語と国文学」100）は、系統的にこの研究の位置づけ、背景、問題点を整理したものである。とくにフィッセルの「ハーグ本」が、前後するローマ字で記された蘭和辞書の中で、いかなる位置にあるのかを実証的に明らかにしたものである。日本、オランダ、イギリス、中国といった国々との交流から、ローマ字で記された「長崎ハルマ」が諸言語の対訳辞書として展開していくことを検証したものである。

(4) 本課題に直結した内容の実績などを次のように公刊した。『シリーズ<日本語の語彙>近代の語彙1 四民平等の時代』(陳力衛編(2020)朝倉書店)を単独で編集し出版した。書名の通り,8巻からなる「シリーズ<日本語の語彙>」の第5巻で,「普通文の形成」「言文一致体の成立」「訳語の創出」「近代辞書と語彙」の四部を立てて,研究分担者の木村一氏をはじめこの分野で活躍する研究者15人の論考を編集したものである。また,「辞書における挿絵の展開 19世紀の英和辞書,国語辞書,和英辞書を資料として」(木村一(2022)『近代語研究』23),「国語辞書の項目中の挿絵 - 明治期と現代における -」(木村一(2022)「文学・語学」234)の2編の論文は,近代日本語という観点から本研究を補完し,一次資料を最大限に活用して調査・考察を行ったものである。

(5) 本研究の周辺論文として,中国語による「近代科学語彙的生成及中日間往来; 以接辞“-力”“-性”為主」(陳力衛(2020)「漢日語対対比研究論叢」11)は蘭学語彙の日中交流,とくに物理学関係の語彙を中心とした内容のものである。英語による‘A Study of the Linguistic and Conceptual Development of diguo zhuyi (Imperialism)’(Liwei Chen(2020)Cultura. International Journal of Philosophy of Culture and Axiology 17-2)は以前日本語で執筆した「帝国主義」の概念史を修正し,英語に訳したものである。編者の要請で「日中近代の翻訳語 西洋文明受容をめぐって」(陳力衛(2020)金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか 東アジアの漢字漢文文化圏 (東アジア文化講座2)』文学通信)という近代翻訳語の流れを分かりやすくまとめた内容の論文を執筆した。「英華字典・華英字典と日本語研究 データベースを生かして」(陳力衛(2023)「日本語学」2023 夏)は,これまで見過ごされてきた使用方法や問題点を丹念に整理し,示唆したものである。

(6) 『図説日本の辞書100冊』,沖森卓也編(木村一・木村義之・陳力衛・山本真吾執筆(2023)武蔵野書院)は,申請者と協力者がともに参加したグループ研究であり,唐話辞書,蘭和辞書,英華字典,英和辞書,および諸種の辞書に関して,本研究の成果などを当該書籍に盛り込んだものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 第13巻第2期
2. 論文標題 通過翻譯，接軌世界 中國第一本百科辭典的誕生	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南國學術	6. 最初と最後の頁 195-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 vol.42-2
2. 論文標題 英華字典・華英字典と日本語研究 データベースを生かして	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語学 2023年夏号	6. 最初と最後の頁 86-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 2023年第4期（総346期）
2. 論文標題 从成語到“和制漢語” 中国成語的一種知識僑易	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科学論壇	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 第1輯
2. 論文標題 章太炎与日本漢学界的不懈之縁	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 章太炎研究	6. 最初と最後の頁 235-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 7
2. 論文標題 客観性を求める表現について 日本語で論文を書く時の困惑	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 さいたま言語研究	6. 最初と最後の頁 188-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 100-1
2. 論文標題 『ドゥーフ・ハルマ』のもう一つの流れ フィッセルのローマ字本の位置づけ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 239
2. 論文標題 出島からバタビヤへの日本知の伝播 蘭和辞書をめぐるメドハーストとフィッセルとの交流	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 成城大学経済研究	6. 最初と最後の頁 109-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 一	4. 巻 23
2. 論文標題 辞書における挿絵の展開 一九世紀の英和辞書, 国語辞書, 和英辞書を資料として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 267-293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村 一	4. 巻 234
2. 論文標題 国語辞書の項目中の挿絵 - 明治期と現代における -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学・語学	6. 最初と最後の頁 141-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 236
2. 論文標題 19世紀における『訓蒙図彙』の海外流布と利用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 成城大学経済研究	6. 最初と最後の頁 149-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 235
2. 論文標題 『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類 メドハーストの書簡に基づいて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 成城大学経済研究	6. 最初と最後の頁 145-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 192
2. 論文標題 『学問のすすめ』の文体	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福澤手帖	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村 一	4. 巻 -
2. 論文標題 啓蒙書の外国語のカタカナ表記の扱い 『西国立志編』の割注を資料として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部日本・日本語学研究論集	6. 最初と最後の頁 273-291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 7
2. 論文標題 語詞概念研究中的古典追溯有何意？ 以《四庫全書》電子版為例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 亞洲概念史研究	6. 最初と最後の頁 279-295
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 268
2. 論文標題 近代訳語のいわゆる転用語について 「文学」と「教育」を例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国語学	6. 最初と最後の頁 22-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 57
2. 論文標題 近代「～主義」的傳播與《清議報》	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 清代文學與翻譯	6. 最初と最後の頁 213-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 234
2. 論文標題 『新聞文件録』から見る19世紀後期の中国語の対訳 日本近代漢語との比較において	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 成城大学経済研究	6. 最初と最後の頁 111-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村 一	4. 巻 秋
2. 論文標題 辞書の名前	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 42-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 231
2. 論文標題 成城学校中国人留学生史へのアプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 成城大学 経済研究	6. 最初と最後の頁 293 322
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 2
2. 論文標題 日中近代の翻訳語 西洋文明受容をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか 東アジアの漢字漢文文化圏』東アジア文化講座2	6. 最初と最後の頁 192 196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村 一	4. 巻 22
2. 論文標題 常用語の分水嶺 『漢英対照いろは辞典』の同一見出し内の複数漢字表記	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『近代語研究』	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 11
2. 論文標題 近代科学語彙の生成及中日間往來; 以接辞“-力”“-性”為主	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 漢日語対対比研究論叢	6. 最初と最後の頁 76 90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 A Study of the Linguistic and Conceptual Development of diguo zhuyi (Imperialism)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Cultura. International Journal of Philosophy of Culture and Axiology	6. 最初と最後の頁 67 88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 陳 力衛	4. 巻 230
2. 論文標題 「農奴」概念の成立と展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 成城大学 経済研究	6. 最初と最後の頁 159 186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 一	4. 巻 5
2. 論文標題 中村正直の語彙	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『シリーズ日本語の語彙 第5巻 近代の語彙(1)―四民平等の時代―』	6. 最初と最後の頁 130-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 陳 力衛
2. 発表標題 西學東漸の別一條管道 近代日本の對華翻譯與出版
3. 学会等名 「洋字與華文：近代香港與上海的西書中譯和出版」國際學術研討會 (國際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 陳 力衛
2. 発表標題 英華字典數據庫與概念史研究
3. 学会等名 「近代中日思想交流的脈絡連鎖」國際學術研討會 (國際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 陳 力衛
2. 発表標題 文化的中轉站 麥都思在巴達維亞的翻譯出版
3. 学会等名 第四屆中國翻譯史國際研討會 (國際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 陳力衛
2. 発表標題 イギリス人宣教師メドハーストの日本語学習と辞書記述
3. 学会等名 関西大学言語交渉研究班第3回研究例会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木村 一
2. 発表標題 『自由之理』における外国語のカタカナ表記の記載方法 外来語への道程
3. 学会等名 鄭州大学漢字文明研究中心/文学院による「漢字文化圏の近代新詞語 材料, 概念与翻譯 国際學術研討会」(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 木村一
2. 発表標題 『雅俗幼学新書』と『和英語林集成』
3. 学会等名 文献日本語研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村一
2. 発表標題 辞書における挿絵の展開
3. 学会等名 近代語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 陳 力衛
2. 発表標題 出島からバタビヤへの日本知の伝播 メドハーストの役割を中心に
3. 学会等名 近代東アジア文化史の再構築 19世紀の百年間を中心に (日文研国際共同研究会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村一
2. 発表標題 啓蒙書の外国語の記述と常用性 『西国立志編』を資料として
3. 学会等名 第19回 漢字文化圏近代語研究会学術大会 「東アジア言語における漢字語彙の過去現在と未来」(国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 沖森卓也, 木村一, 木村義之, 陳力衛, 山本真吾	4. 発行年 2023年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 301
3. 書名 図説 日本の辞書 100冊	

1. 著者名 陳力衛主編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 上海古籍出版社	5. 総ページ数 16929
3. 書名 近代日本漢文文献叢刊 第一輯(28冊)	

1. 著者名 陳力衛 編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 193
3. 書名 シリーズ日本語の語彙 第5巻 近代の語彙(1) -四民平等の時代-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 一 (Kimura Hajime) (90318303)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------